

採血時にキワニスドールを用いた 効果的なプレパレーションに関する研究

三木 周 角英里子 乾 実沙 塩谷純平

大阪府済生会中津病院 看護部

抄録

プレパレーションとは、子どもに対して、認知発達段階に適応した方法で、説明を行い、子どもや親の対処能力を引き出すような環境および機会を与えることである。キワニスドールは、そのツールの一つであり、先行研究でも処置の安全性が高まったと報告されている。キワニスドールを導入するにあたり、より効果的にプレパレーションが行われるためにはどのようにすればいいのかを検討した。

Key word：キワニスドール プレパレーション 採血

背景・目的

プレパレーションとは、子どもに対して、それぞれの認知発達段階に適応した方法で、病気、入院、手術、検査、その他の処置について説明を行い、子どもや親の対処能力を引き出すような環境および機会を与えることであり、子どもに情報を正確に伝えること、つまり嘘をつかないことが大事となる。

プレパレーションのツールの一つにキワニスドールがある。キワニスドールとは、白い木綿生地にポリエステル綿を詰めた身長40cm、体重50gの目も鼻も口もない小さな人形であるが、先行研究でも、使用することで検査や処置が、安全に行えたという報告がされている。子どもの検査や処置の安全性を高めるために、今後プレパレーションを行う際にキワニスドールを導入するにあたり、キワニスドールを用いたプレパレーションを効果的に行うためにはどのような方法があるかを検討することを目的とした。

方 法

小児科経験5年目以上の小児看護に熟練した看護師5名を対象とし、対象となった看護師がキワニスドールを用いて、外来での採血前にプレパレーションを実施した。その後、対象看護師5名にフォーカスグループインタビューを行い、「キワニスドールを用いたプレパレーションについてどう思いましたか。」「上手くいったことはありますか。」「上手くいったときに、工

夫したこと。また、上手くいった理由。」「反対に上手くいかなかった理由。」「メリット、デメリットに感じる。」「必要性があると思いますか。」「これからも使おうと思いますか。」「子ども、家族の反応はどうでしたか。」「新人が同様に使用することで、スムーズにできると思いますか。」「について聞き、内容を録音した上で、プレパレーションに関係する内容を抽出した。

倫理的配慮

対象となる看護師には、個人情報の保護、研究への参加は自由意志であり、辞退した際にも不利益を被らないことを、プレパレーションを実施する患児の家族には、個人情報の保護、処置の安全性について、それぞれ文章と口頭で説明を行い、書面にて研究の同意書を得た。また、研究に実施するにあたり所属施設の看護部倫理審査委員会の承認を得た。

結 果

対象となった5名の看護師が採血を実施した患児は15名であった。性別は男児14人(93.3%)、女児1名(6.7%)であった(図1)。年齢は2歳1名(6.7%)、3歳5名(33.3%)、4歳4名(26.7%)、5歳4名(26.7%)、6歳1名(6.7%)であった(図2)。過去に採血を経験した患児は12名(80%)、経験していない患児は3名(20%)であった(図3)。患児の付添い人は、母親が13名(86.7%)、父親が2名(13.3%)であった(図4)。

フォーカスグループインタビューから抽出できた上位カテゴリーは『環境作り』『プレパレーションの実施』『採血の実施』『キワニスドールの取り扱い』であった。

さらに、下位カテゴリーとして『環境作り』では『キワニスドールへの興味』『家族の協力』『説明の対

象者』に分けられた。『プレパレーションの実施』では『看護師からの説明』『採血のイメージ』『患児の反応』『時間の制約』に分けられた。『採血の実施』では『協力的な姿勢』『採血への恐怖』に分けられた。『キワニスドールの取り扱い』では『素材』『衛生面』に分けられた（表1）。

表1. 抽出されたカテゴリー

環境作り	キワニスドールへの興味	関心	YouTubeとか見てて、あんまり話しかけても興味なさそうっていうか、あまり心開いてくれなかったんですけど、人形を見せたら 何それ。みたいな感じですごい興味を持ってくれたんで、介入しやすかったなっていうのありました。
			キワニスドールそのものが見知らぬものっていうのがあったので、あの、とりあえず1回お話を聞いてみようかなモードになってくれた。
		愛着	愛着を持った状態で処置をするとかになってきたら、結構効果的だと思うんですよ。
			愛着を出せることができなかったっていうのがあるので、興味とか、彼らがね、まず心を閉ざしてしまった状態やった。
			愛着を持たせるキワニスドールを1人1個配れる、鼻くそほじってても、絶対触っても全然大丈夫なようにしてくれてたらいいかなと思う。
			気持ちに家族に絶対いってしまうので、人形はそれの中でね、繋がりを作っていってたら説明できるみたいな感じの状況とかやったら、ベストかなと思う。
		無関心	全然チラチラ見てキワニスの話は聞いてくれない。
			本人もちょっと興味持ってくれてたら、それをはねとけることもできるんですけど、こっちからプレッシャーもある、本人も聞かぬっていうパターンになる。
	家族の協力	母親	お母さんも一緒に、人形さんこうやってるやん、こうやってみとかって声かけしてくれて。
			「ちょっとまず話だけ聞いてね。」みたいな感じで、お母さんから促しとかも話を聞いてくれて。
			ちょっと気長に待とうかなみたいな感じで、話を聞いてくれた。
		父親	「もう彼はビビリなんで、逆に待てば、怖いと思うんで。」って、お父さんに連れていかれてる
			「ほんま早く帰りたい。え、それって時間かかりますか。」
			お父さんも早く帰りたい。多分、お母さんからなんか頼まれたとかで来てる感じの人もいた。
			お父さんは「めんどくさいな。」って感じがちょっとありましたね。
			お父さん絡みとかになってくると拒否も強くて、お父さんに連れられてとかになると、プレッシャーが半端ない。
			お父さんは完全に、もう早く帰りたいって気持ちがオーラからわかるんですよ。
	説明の対象者	患児の属性	理解ができてる年齢になると、まっさらな状態でキワニスドールを導入するのはありやと思うんですよ。
			年齢によるかなと思うんですけども、5歳とかだったらもういらんかもしれない。
			必要性はね、状況によってか、年齢と状況が2つ組み合わせたことによって、必要性が生まれるかなと思います。
			きっかけそのものもなかなか相手次第で難しいかな。
プレパレーションの実施	看護師からの説明	対象の明確化	子供に説明するしかないっていうので、子供にしっかりこう関わって説明したこと。
			なんか人形を自分が持たされてることで、子供に喋らんなんから、子供に絶対向かって喋るっていうのはすごいメリットかなと思う。
			親にふれたりせえへん説明があってのはすごい良かったなって思いました。
			子供に向けて喋るが多分工夫何やと思うな。
	採血のイメージ	イメージ化への補助	処置に対するイメージはつきやすかったんで、つきやすくはしてくれてました。
			彼らの中に手順の流れは イメージさせることができたんですよ。
			やっぱり事前情報、こういう風にやるよっていうことを説明してたから、なんかなとも思ったりしたんで、それはよかったんちゃうかな。

採血時のプレパレーションに関する研究

プリパレーションの実施	採血のイメージ	イメージ化への補助	言葉で一生懸命伝えてもわかりにくいのを、あの人形を使ってやってあげると、言葉よりも、本当子供によく伝わったんじゃないかな。
			言葉はあんまり理解しないかなってところが今まであったのが、人形を通してすごく伝わりやすかったんじゃないかなってすごい思います。
			キワニスドールに試しにあなたが駆血帯巻いてみてねとか、そういうことをまでにこぎつければ、私は効果的だと思う。
			人形本人も持ってるから。人形のここにピンクの巻くよって、はい出してって。人形さんみたいに出してとは説明したりはしましたけど。
			人形持たしてたかな。説明した後の人形持って、入っというて。
			3歳とかの子に対して、ちょっともう言葉があんまりイメージに繋がらへん子に関しては、この人形を使ったらイメージできるから、また使いたいなとは思いました。
	イメージ化への弊害		キワニスドールに対する文句みたいになるけど、胸短いから、僕がなんか巻いてるけどね、じゃんけんゲーがなんか、もうもしてるから、え。みたいな感じで、ちょっと、で、アル綿も、こうやって消毒してとやってやるのが、なんとなく、ここの想像がしづらそう
			お母さんに抱っこ、抱きつくとかまで、腕出すまでは行けても、最後のこの、なんか縛ります、消毒します、じゃんけんゲーしますが、なんとなく想像できひんまま、なんかもう行っちゃえて感じて行っちゃう。
	患児の反応	患児からの協力	外でたまにごねる子いるじゃないですか、入りたくないってごねることなく、みんな処置室まで来て、ここまで手出してきてます。そういうところは全部スムーズに行けた。
			本人のモチベーションを上げるような感じで説明をしてから、ちょっと受け入れてくれたかなっていう感じはありました。
			本人にどうやったか覚えてるって聞いて、すごい本人持ち上げながら、話進めていったら、割と知ってるでみたいな感じで、4歳、5歳なんで知ってる自分はすごいって感じやったんか、いやできるで。みたいな感じだったりもしたんで、年齢とか関係あるかなと思いました。
	恐怖心の増幅		イメージさせてしまったことによって、次の段階の針刺すって段階を分かってしまったんで、余計に恐怖心が来てしまって、あのやっぱりやめる。みたいな感じで。
			最初のけぞってたけど、話していいって言って、この人形使うけど。みたいな感じの話をして、あ、その人形に何の話するのって採血。やっぱり1年以内の経験があって、それが怖かった経験があるので、余計にかなっていうのとあるかなと思います。
			話を聞いてるうちに過去の記憶が蘇ってきて、もう嫌や〜って聞くモードでなくなって、プイっとしてしまってた、もうお父さんとかにしがみついてしまってる。
			やっぱりイメージを付けさせやすいっていうか、深いイメージをつけてしまうことによる拒否が強まってしまったかなっていうのは、デメリットかなと思いました。
			外来の採血って、まず本人が恐怖心が多い子、男子ばかりだったので、4歳のもう採血をするってことを最初に聞かれてし、お父さんとかお母さんに説明されてしまってたから、もう聞くモードでしなかったの。
			聞くモードに対する人間 やったらキワニスドールは効果的やと思うけど、もうシャットダウン状態やったら、もう何をしても心には響かない状態でしたね。
			事前情報を知ってて、で、待って知ってて、で、採血は怖いものっていう経験をしてしまってる子に対しては、まず、その環境作りから始めへんとあかんで、ちょっと難しかったかなっていうのはありました。
			経験をしてたっていう子であることと、その時に元々恐怖心があったってことと、看護師が説明する前に、お母さんとお父さんがとかにもうすでに今日は血の検査あるよって朝から説明を受け、多分朝かけてたんやろうなって、ここでごわごわ病院に来てる状態。で、もう恐怖心 なんか8割ぐらいのところに看護師が来たことによって、10割になっても話聞くモードではなくなったっていう感じでしたね。
			やっぱり採血の話や。みたいな感じで。話していいかな言ったら、もう話すら聞かない。
	時間の制約		時間の制約だけかなって感じやけど、結局でもその騒ぎまくるから、あれで説明しようがしまいが同じぐらい時間かかってるんかもしれへん。
			実際は別に全員にあれ使ってたとしても、そこまでなんかあんまり時間は関係ないかもしれへんな。
			外来っていうね、時間の制約がある状態で、心の準備がね、彼らの中につく前に連れて行ってしまってる状態やったので、家族さんとかの予定もあったので、それができへんかった。
			やっぱり時間的、気持ち的なゆとりがある状況や余裕がある状態やったら、私はキワニスドール使った方がうまくいくと思います。

プリパレーションの実施	時間の制約	時間的にこう本人との関係性が作れる。作られへん状態やったら難しいかなと思います。
		彼らの心の準備ができる前にキワニスドールをやって、多分ね、30分とか1時間ぐらいそういうことするんやなと思って、心の準備をしてくれてたら、また反応が違った。
採血の実施	協力的な姿勢	寝転むって決めた子は、寝転んで泣くけど、動かずにできたってことが、ちゃんと理解して、嫌がらずにできたかな。
		手出すとこまでって結構泣く子多い中、割とみんなそこまではスムーズに行けてた。
		すんなり処置室に入ってくれて、自分で座るか寝転ぶかある程度答えてくれて、座る子は座ってある程度動かずにできて、泣くんですけど、動かずにできた。
	採血への恐怖	ここに巻くんやなみたいな感じのことは処置台に着いた瞬間に、それはわかってるから、逆に巻いたら貼り刺されるんやなと思って、ギャーと泣かれたんですけど。
		結局、あの針刺すさす時の恐怖心には結局は勝てなかった。
キワニスドールの取り扱い	素材	拭けるやつやったらいいですけど、布なので。
		ベルちゃんみたいなやつやったらいいです。布だったので。
	衛生面	鼻ほじってる子が、それでキワニスドールを触ろうとしてる。どうしても手伸ばされたら、あげるならあれなんですけど。それを使いますってなれば、私やったら嫌。
		抱きしめたらよだれつく。
		感染媒体ね。

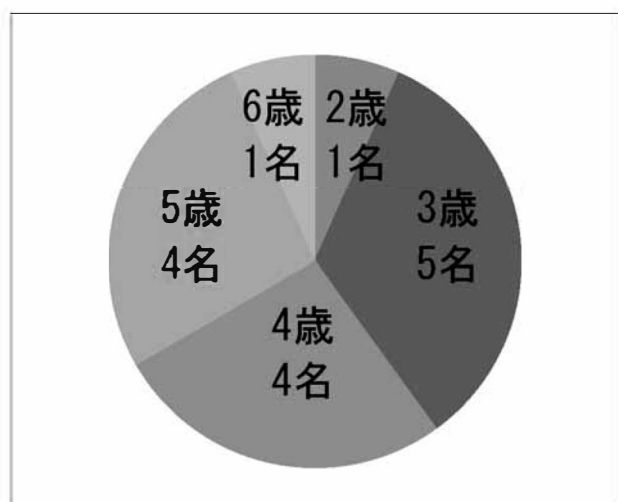


図1. 患児の年齢

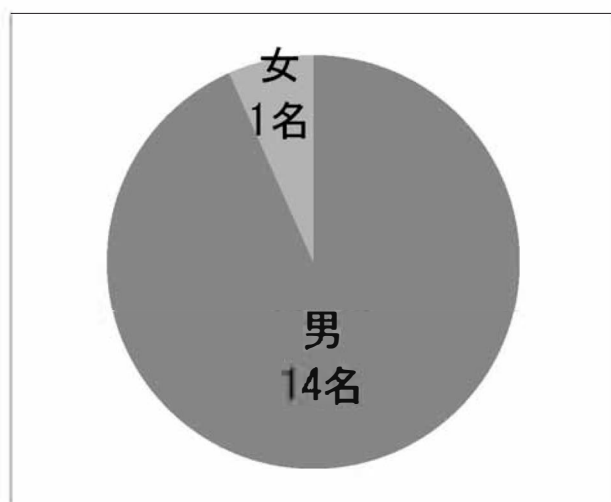


図2. 患児の性別

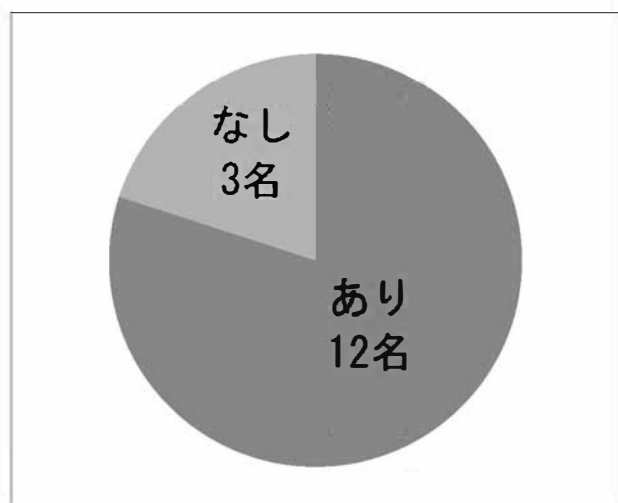


図3. 採血の経験

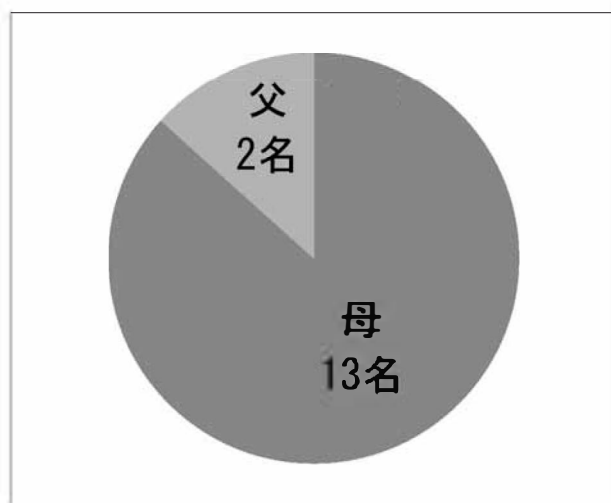


図4. 付添人

考 察

今回のインタビュー内容から、患児がキワニスドールに興味をもつことで、キワニスドールへの関心が高まり、看護師の話を聞こうとする姿勢を作ることができていたことから、キワニスドールを用いたプレパレーションをより効果的に行うためには、患児がキワニスドールに興味をもつような環境作りが重要だと考えられた。また、家族の協力があれば、よりキワニスドールへの関心を高めることができおり、今回家族の協力を得られた患児は、キワニスドールに興味を持つことで、プレパレーションに集中することができていた。逆に家族が非協力的であると、プレパレーションをする時間の確保も困難となり、結果として安全性を確保しづらい状況下での採血の実施となった。小林らは、プレパレーションにより家族が検査や処置を理解し、普段どおりに子どもと関わることで子どもに安心感が生まれるとしている。¹⁾そのため、家族を巻き込むことは、キワニスドールへの関心が高まり、プレパレーションをより効果的にできるものと考えられる。

また、看護師もキワニスドールというツールを使用することで、プレパレーションの対象が患児からぶれないというメリットが見られた。加えて、キワニスドールが処置のイメージ化の補助としての役割をもつことで、看護師からの説明により患児が採血のイメージを言語だけの説明よりも、より具体的にイメージすることができ、恐怖心で泣いてしまうこともあったが、処置室まで自分で歩けたり、腕を自分から出してくれたり、協力的な姿勢をつくることにも繋げることができていた。

今回採血を行った患児は、性別では90%以上が男児、採血の経験では80%が採血の経験があり、属性の偏りがみられている。そのため、今後は患児の属性を統一させていき、より対象者や状況に合わせたキワニスドールの使い方を検討していく必要がある。

結 論

今回のインタビュー内容から、「環境作り」「プレパレーションの実施」「採血の実施」「キワニスドールの取り扱い」の4つのカテゴリーに分類できた。

プレパレーションを行う際には、家族も巻き込むことで、患児のキワニスドールへの関心を高め、より効果的に行うことができた。また、患児が採血のイメージできることで、処置室まで自分で歩けたり、腕を出してくれたり、採血に対して協力的な姿勢につなげる

ことができ、採血をスムーズに実施することができた。

引用文献

1. 小林佐代子, 松村明日香, 掛川将司: 全身麻酔で手術を受ける子どもと家族を巻き込んだプレパレーションの展開, 市立千歳市民病院医誌, 2013, 9 (1): 38-42